

Title	カザフ語の名詞修飾表現
Author(s)	藤家, 洋昭
Citation	大阪外国語大学論集. 16 p.35-p.59
Issue Date	1997-02-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79715">https://hdl.handle.net/11094/79715</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## カザフ語の名詞修飾表現

藤 家 洋 昭

### Қазақ тіліндегі есімдердің анықталуы

ФҰЖИЕ Хироаки

Бұл мақалада қазақ тіліндегі зат есімдердің анықталуы жөнінде зерттеу жүргізілді. Атап айтқанда, Қазақ тілі сөз таптарының, сөздердің зат есімдерін қалай анықтайтындығы түсіндірілді. әсіресе септік жалғаулары жалғанған зат есімдердің (мысалы Алматы—ға, Алматы—дан сияқты) басқа зат есімдерді қалай анықтайтындығы, және етістіктер зат есімді анықтағанда анықталған зат есімнің лексикалық мағынасымен оны анықтаған етістіктің морфологиялық тұлғасы арасында тығыз байланыстың бар екенің яғни: хат, бұйрық, жауап сияқты зат есімдермен оларды анықтайтын етістіктің тұлғасы, және иіс, дауыс, дүбір сияқтыларды білдіретін зат есімдермен оларды анықтайтын етістің тұлғасы т. б. түсіндірілді.

#### 1.はじめに

カザフ語 (Қазақ тілі) はチュルク諸語のうちのひとつで、中国西部からカスピ海沿岸にかけての広い地域で話されている。系統的にはトルコ語と同系の言語である。基本語順は「主語—目的語—動詞」の順で典型的な動詞文末型言語であると言える。カザフ語においてもあるものがあるものを修飾するという現象はもちろん見られる。その中で少し複雑な場合、例えば日本語で「トルコからの手紙」というような場合の格語尾の付いた名詞による修飾、あるいはまた「羊の肉を焼く男」「羊の肉を焼くにおい」の違いに見られるようないわゆる「内の関係」と「外の関係」がどのように表されているかについてはこれまであまり明らかにされていないような印象を受ける。本稿ではカザフ語における名詞修飾表現のうち特に「格語尾の付いた名詞」「つなぎのことば」「内の関係と外の関係」に重点をおいて解明記述する。

#### 1. 1. カザフ語の語順

述語は文末に来る。目的語は動詞に先行する。

Нұрбек су ішті<sup>1)</sup> 「ヌルбек (人名) は水を飲んだ。」

修飾語は被修飾語に先行する。

үлкен асхана 「大きな食堂」

ең үлкен асхана 「いちばん大きな食堂」

қалада ең үлкен асхана 「町でいちばん大きな食堂」

мен тұрған қалада ең үлкен асхана 「私が住んでいる町でいちばん大きな食堂」

修飾部の長さによって前からかかったり後からかかったりということはない。また、英語にあるようなタイプの関係詞は存在しない。

このように、修飾において語順の違いはないわけだから、修飾における外見上の違いは形態的な違いにしか見ることができない。

## 1. 2 名詞修飾

まず、名詞とは何か、修飾とは何かということが問題になるであろう。深く考えていくときりがないのだが、本稿で名詞と呼んでいるものは、カザフ語ではзат есімと呼ばれているものである。ここでカザフ語の品詞分類について従来からの説を見ておくと、例えばҚазіргі қазақ тілі (以下ҚҚТと略) は次の9種類の品詞に分類している<sup>2)</sup>。

1. зат есім (名詞) 2. сын есім (形容詞) 3. сан есім (数詞) 4. есімдік (代名詞) 5. етістік (動詞) 6. үстеу сөз (副詞) 7. еліктеуіш (擬音詞)<sup>3)</sup> 8. көмекші сөз (助詞)<sup>4)</sup> 9. одағай (感動詞)

他の研究、例えば Geng (1989) においても、上にあげた分類とほとんど同じである。なお、本稿の目的はカザフ語の品詞分類ではないので、従来からの品詞分類に異論をとなえることはしないで、上にあげた説に従うことにする。

зат есімすなわち名詞についてҚараев (1993) は次のように定義している。「ある物質、物体、自然現象、社会的存在を指すものをзат есім (名詞) と呼ぶ。名詞のカテゴリーに入る語は、具体的な物にしろ、概念にしろ、それらの名称を表し、『誰』『何』という問いに答えるものである。」ҚҚТ等他の研究でも見解は大体同じようなもので、いずれも伝統的な立場に立って「誰」「何」に答えることのできる語類が名詞であるとしている。本稿ではカザフ語の名詞の定義についてはこれ以上深入りはしないが、他の品詞との境界について少しだけ触れておく。

カザフ語では名詞と形容詞 (сын есім) の間に線が引きにくいことがある。物質を表す, алтын 「金」, күміс 「銀」等は名詞とされているが、形容詞的な性質ももっている。また、一般に形容詞も名詞もそれらに付く文法的な接尾辞は同じ様な種類のものが多く、名詞にしか付かない種類の語尾・接尾辞、逆に形容詞にしか付かない語尾・接尾辞というものは多くない。また、一部の語は名詞であるか副詞 (үстеу) であるか判断に苦しむ。бүгін 「今日」, ертең 「明日」等は副詞 (үстеу) とされることが多いが、名詞と同じように格変化する (例: бүгінге дейін 「今日まで」 (-ге は与格語尾))。

このような問題はありますが、一応定説に従うことにする。

次に修飾とは何かということであるが、これもそれだけ大問題である。本稿では寺村 (1980) を参考にして、名詞修飾を一応、「名詞を中心とする、そして全体で名詞として文中で機能する内心構造のその名詞に付随している形式」というように定義しておく。

また、修飾というと、いわゆる制限的な修飾と非制限的な修飾の違いが問題になることがある。カザフ語では制限的な「私が昨日会った学生」は мен кеше кездескен оқушы で、非制限的な「私が昨日会ったヌルベク」は мен кеше кездескен Нұрбек であり、оқушы と Нұрбек を除いた部分は全く同じで、少なくとも形の上では制限用法と非制限用法の明確な区別はしていないようである。本稿では以下、制限・非制限の違いを意識しないで分析を進めていくことにする。

## 2. 名詞による修飾

カザフ語に限らず、名詞が2つ以上並んでどれかがどれかを修飾することが見られる。その場合それらの2つ (以上) の名詞の結びつきの関係はさまざまであり、それらの関係が外見上形の上でどのようにあらわれるかは言語によっても異なるであろう。カザフ語で名詞が名詞を修飾するとき、日本語などに見られない特徴として、修飾される方の名詞に三人称の所有接尾辞が付くことがある。三人称の所有接尾辞について触れる前に、所有接尾辞とはどういうものであるかについて簡単に見ておくことにしよう。所有接尾辞とはその名詞の所有者を示すもので、例えば、「私の家」なら、「家-私の」というように「私の」を意味するものを接尾辞でもって表す。үй 「家」

үй 「家」

үй-ім 「私の家」 үй-іміз 「私達の家」

үй-ің 「君の家」 үй-дерің 「君達の家」

үй-і 「彼の家・彼らの家」

これらのうち三人称の所有接尾辞、すなわち、-і (とその異形態)<sup>5)</sup> が名詞による名詞修飾に関わってくるのである。

名詞による名詞修飾で外見上もっとも単純なパターンと言えば名詞がただ単に2つ (以上) 並んでいる場合であろう。ただしカザフ語にはこのパターンはあまりなく、名詞が2つ (以上) 並ぶと被修飾名詞に三人称の所有接尾辞が付くというパターンが多い。また、名詞が2つ並んできたものがいわゆる名詞句なのか、複合語であるのか問題になることがある。例えば「アンカラ (地名) の大学」と「アンカラ大学」。カザフ語では「アンカラ大学」は “Анкара университеті” であり、やはり三人称の所有接尾辞が付く。<sup>5)</sup>

名詞が名詞を修飾するとき、修飾する名詞と修飾される名詞のあいだにつなぎのことが介在することがある。というより言語によってはつなぎのことが間に入るほうが一般的で、例えば

日本語ではつなぎのことが介在することによってはじめて名詞を修飾することが可能になる(益岡 1994)と言われている。その場合接続の機能を果たす代表的な語は「の」である(益岡 1994)。カザフ語のつなぎのことが全般については後でふれることにして、ここでは「の」だけについて考えると、「の」というとカザフ語では属格語尾(—нің ~ның ~дың ~дің ~ тің ~тың)が思い浮かぶ。属格語尾は実際 “Мұхтар Әуезовтың шығармасы” 「ムフタル・アウエゾフ(人名)の作品」のように名詞修飾にも用いられる。しかし、属格語尾はあくまで語尾であり基本的に名詞にしか付くことができない<sup>7)</sup>。他の格語尾に付くということはないので \*—де —нің \*—ге—нің 等の形もない。<sup>8)</sup> したがって日本語の「の」とはかなり違うものであることを頭に入れておいた方がいい。

名詞が名詞を修飾する場合(構造で)、修飾するほうの名詞を名詞1、修飾される方の名詞を名詞2と呼ぶことにすると、名詞2が動詞の名詞化したものか、または、ある動詞と関係づけられるとき、名詞1が名詞2に対してなんらかの格関係をもって修飾する場合がある。カザフ語ではそのようなときにどのような現象がおきるかが問題であるが、その前にカザフ語の格とそれを表す形式についてごく簡単に見ておくことにする。格とは何かということも大問題であるが、ここでは形態的な面を重視して、従来からのカザフ語文法研究に従うことにする。

従来からのカザフ語文法では格は格語尾によって示されるとされ、次の7つが格として認められている。1. 主格(атау септік) 2. 対格(табыс септік) 3. 属格(ілік септік) 4. 与格(барыс септік) 5. 位格(жатыс септік) 6. 奪格(шығыс септік) 7. 補助格(көмектес септік)

ここで簡単に格の用法を概観しておく。

## 2. 1. 格の用法<sup>9)</sup>

### 主格

カザフ語の主格は格語尾ゼロ。用法としては、主語、非限定の目的語などを表す。

Мектепте балалар оқиды 「学校で子供たちが学んでいる。」

Нұрбек су ішті 「ヌルベク(人名)は水を飲んだ。」

### 属格

語尾 —нің ~ның ~дың ~дің ~тің ~тың 限定修飾語になる。

Ана таудың биіктігі екі жүз метр келеді. 「あの山の高さは二百メートルである。」

Қаламыздың бакшасы өте жақсы. 「我が町の公園はとてもよい。」

カザフ語に限らず、チュルク系の言語では名詞が名詞を修飾する場合に限定修飾と非限定修飾の二つのタイプが見られる。非限定修飾とは二つ並んでいる名詞の前のほうの名詞が主格(格語尾ゼロ)である修飾法である。一方、限定修飾のほうは前に来る名詞が属格になる。また、どちらの場合も後ろに来る名詞には所有接尾辞が付く。この二つの修飾法の違いは、カザフ語と同じくチュルク系の言語であるトルコ語では、限定修飾法は「所有」、非限定修飾法は「種類」を表

すと言われている (勝田 1982) が、これはカザフ語にもそのままあてはまる。例えば、限定修飾による (ана) әйелдің тақиясы は「(その) 婦人の (所有している) 帽子」という意味であるのに対し、非限定修飾による әйел тақиясы は「婦人 (用) の帽子」という意味である。<sup>10)</sup>

#### 対格

語尾 -ні ~ны ~ды ~ді ~ті ~ты

限定目的語やある種の修飾成分がついた目的語を表す。それ以外の目的語は対格語尾を付けずに (=格語尾なしで) 表される。

Нұрбек бұл кітапты библиотекадан алды. 「ヌルベクはこの本を図書館で借りた。」 (cf. Нұрбек библиотекадан кітап алды. 「ヌルベクは図書館で本を借りた。」)

#### 与格

語尾 -ге ~ға ~қа ~ке。

1) 方向を表す。

Ол ертең Ташкентке жүреді. 「彼は明日タシュケント (地名) へ行く。」

2) 時間を表す

Мен екі күнге руқсат алдым. 「私は二日間の休暇をもらった。」

3) 値段を表す

Бұл кітапты отыз теңгеге алдым. 「この本を30テンゲ (通貨の単位) で買った。」

#### 位格

語尾 -де ~да ~та ~те 場所, 時間を表す。

Сайра мектептің залында кино көрді. 「サイラ (人名) は学校のホールで映画を見た。」

Нұрбек алты жасында оқуға кірді. 「ヌルベクは6才のとき入学した。」

#### 奪格

語尾 -ден ~дан ~тан ~тен

1) でどこを表す。

Нұрбек мектептен қайтып келді. 「ヌルベクは学校から帰ってきた。」

2) 材料を表す。

Жапонияда ағаштан жасалған үй көп. 「日本には木造の家が多い。」

3) 比較を表す。

Мына ат ана аттан жақсы<sup>11)</sup>. 「この馬はあの馬よりいい。」

#### 補助格

語尾 -мен ~бен ~пен

補助格にはいろいろな用法がある。Geng (1989) は次のように分類している。

1) 道具を表す。

Мен қаламмен жаздым. 「私はペンで書いた。」

2) 共同関係を表す。

Нұрбекпен әңгімелестім. 「ヌルベク（人名）と話をした。」

3) 動作の仕方を表す。

Ол ықласпен тыңдады. 「彼は注意して聞いた。」

4) 時間を表す。

Ол таң атысымен орнынан тұрып кетті. 「彼は日の出とともに起床した。」

5) 原因を表す。

Мен жұмыспен келе алмай қалдым. 「私は仕事で来ることができなくなった。」

格の主な用法は以上の通りである。

次にこれら格語尾の付いた名詞が他の名詞を修飾する場合にどのようなことが起こるかをみていく。

## 2. 2. 格語尾のついた名詞による修飾

日本語では「トルコからの手紙」「イスタンブールへの道」のように格助詞の付いた名詞が他の名詞を修飾することがみられる。そして格助詞のついた名詞が他の名詞を修飾する場合、「の」を介することがある（例 イスタンブールからの直行便）一方で「に」の付いた名詞のように「の」を介しての修飾ができないものもある。（例. \*東京にの友人）。

カザフ語では格語尾のついた名詞が他の名詞を修飾するとき、つなぎのことばとして何があるか、消える格語尾はあるか、あるいはそもそも格語尾のついた名詞が他の名詞を修飾することなどあるのか等わかっていないことが多い。そこで本節では以上のような点の解明を目標にする。

それでは、カザフ語の格語尾がついた名詞が他の名詞を修飾する場合、どのような現象がみられるか、順に見ていくことにする。

### 属格

属格の名詞は他の名詞を修飾することがその本来の役割のようなどころもあるのであえて触れる必要はないであろう。属格の名詞が他の名詞を修飾する場合、修飾される方の名詞に所有接尾辞が付くことを忘れてはならない。

Нұрбектің пікірі 「ヌルベクの意見」

### 位格

位格の名詞は位格の名詞はgi（異形態 gi～ғы）を接尾させることによって名詞修飾ができることが知られている。例：Алматыдағы туыс 「アルマアタ（地名）の親戚」。ではgiなしに名詞修飾が可能かという点、普通はできない。例：\*Алматыда туыс（アルマアタで・親戚）

-gi を付けることによって連体修飾か連用修飾かがはっきりする。

Токиодағы досыммен әңгімелестім. 「東京の友人と話をした。」

Токиода досыммен әңгімелестім. 「東京で友人と話をした。」

#### 与格

日本語では「トルコへの手紙」のように助詞「へ」に「の」を付けることによって名詞を修飾することができる。

カザフ語では、与格名詞そのままによる修飾, мұғалімнің оқушыға жауабы「先生の生徒への答え」, президенттің Америкаға сапары「大統領のアメリカへの旅行」等は可能である。位格の名詞に付くことのできる, -gi (異形態 gi ~ғы) を与格の名詞に用いることはできない。

\*Түркияғағы хат (トルコへ-gi・手紙)

#### 奪格

奪格語尾のついた名詞が他の名詞を修飾する場合, 下に示したようにそのままでは直接他の名詞を修飾できないと考えていいようである。

\*Түркиядан хат (トルコから・手紙)

\*Ағаштан үйді сатып алдым. (木から・家を・買った (сатып алды = 買った))

与格では可能である表現を, 他の部分をそのままにしておいて格語尾だけ奪格にかえると非文法的になる。

Америкаға ұшақ аптасына бір рет қана. 「アメリカへの飛行機は週に1便だけである。」

\*Амрикадан ұшақ аптасына бір рет қана. (アメリカから・飛行機・週に・1・回・だけ)  
なぜ与格の場合は可能で奪格の場合は不可能であるかの説明は今のところできない。つなぎのことばが関係しているわけでもなさそうである。与格より奪格の方が用法に多様性があることと関係があるのかもしれないが, 理由の解明については今後の課題にしたい。

#### 補助格

補助格の名詞もそのまま名詞修飾が可能な場合がある。

Нұрбектің Сайрамен әңгімесін тыңдадым. 「私はヌルベクのサイラとの会話を聞いた。」

А мемлекетпен соғысқа Нұрбек қатнасты. 「A国との戦争にヌルベクは参加した。」

補助格の名詞でもいわゆる道具を表す場合は不可能なようである。

\*қаламмен хат (ペンで・手紙)

\*Қарындашпен хатты тапсырып алдым. (エンピツで・手紙・さずけて・得た (受け取った))  
位格の名詞のように-gi を付けることはできない。

\*қаламменгі хат (ペンで-gi・手紙)

#### 対格

対格の名詞は動詞の目的語を表すことがほとんどである。したがって対格の名詞が他の名詞を



修飾するとすれば、被修飾名詞は動詞と密接な関係があり、対格の名詞は意味的には被修飾名詞の目的語であると考えるのが自然ではないと思われる。

そういう点を考慮すれば、

Түрлі астықты өндіреміз. 「いろいろな穀物を生産する。」

という文と密接な関係がある、

түрлі астықты өндіру 「いろいろな穀物を生産 (すること)」

という表現はある。астықтыは対格語尾をつけたまま өндіру を修飾している。しかし、өндіру は動名詞であり、「生産」なのか「生産すること」であるのかという問題がある。

もっと名詞であることがはっきりしている例を探してみる。

Жаңа телевизорды талап етеміз. 「(我々は) 新しいテレビを要求する。」

という文における талап 「要求」をとりだして「新しいテレビの要求」という表現はどうかということ、

жаңа телевизор талабымыз 「(我々の) 新しいテレビの要求」となって、対格語尾が現れない。名詞 талап を対格語尾付けたままでの修飾はできない。

\* жаңа телевизорды талап (新しい・テレビを・要求)

\* жаңа телевизорды талабымыз (新しい・テレビを・(我々の) 要求)

位格の名詞で可能であったような -gi を伴った修飾もできない。

\* жаңа телевизордығы талап (新しい・テレビを -gi ・要求)

動名詞をどう扱うかによって議論はわかれるが、対格語尾の付いた名詞が他の名詞を修飾することは難しいといってもよいのではないと思われる。

まとめ

位格の場合はつなぎのことば -gi を付けることによって名詞修飾が可能になるが他の格で -gi が付きうるものはない。したがって -gi のつなぎのことばとしての働きは非常に限られていると言えることができる。そのまま名詞修飾が可能かどうかは格によって、また同じ格でも用法によって異なる。

### 3. 形容詞による名詞修飾

形容詞は名詞を修飾するものとしては典型的なものであるということが出来る。

形容詞の用法として英語などでは「限定用法」と「叙述用法」の二つがあることが知られている。「限定用法」とは the beautiful flower のような用法であり、「叙述用法」とは the flower is beautiful などのような用法であるが、ここでとりあげるのは主に「限定用法」の方である。

日本語には「もう少し大きいのをください」の「の」のようなものがあるが、カザフ語には「の」のような軽い語類が見られない。その代わり被修飾名詞をはっきり言わないときに用いら

れるのが形容詞の名詞用法 (сын есімнің заттануы) と呼ばれる形容詞の用法である。これは形容詞に格語尾などを付けて名詞と同じようにふるまわせるものである。

例: үлкенді сыйла「年上を敬え」cf. үлкен адамды сыйла「年上の人を敬え (адам「人」)」

逆に言うと形容詞に格語尾などを直接つけることができるから、「の」のようなものが必要ないとも言える。

#### 4. 副詞による修飾

副詞は普通、動詞や形容詞を修飾することをその第一の職能としているが名詞を修飾することがないわけではない。

英語では限られた副詞ではあるが He is only a child. Even Homer sometimes nods. のように名詞を修飾する副詞がある。また日本語においても「突然の雨」のように「の」を介して副詞が名詞を修飾する例がある (益岡 1994)。

カザフ語では形容詞はそのまま連用に使えるのでそのぶん本来の副詞は少ないが、もちろん連用しか使えない語類も存在し、それらがүстеу (副詞) と呼ばれている。連用にしか使えないというのはそのままの形では連用にしか使えないという意味である<sup>12)</sup>。例えばкеше「昨日」ертең「明日」қазір「今」、төмен「下」等は多くの文法書・辞書 (Geng 1989, Қараев 1993, Қазақ тілінің грамматикасы (以下ҚТГと略す), Қазақ, тілінің түсіндірме сөздігі等) で副詞とされているが、これらは-гіを接尾することによって名詞修飾が可能となる (例: кешегі жиналыс「昨日の会議」、ертеңгі ауа райы「明日の天気」、төменгі қабат「下の階」)。もっとも、-гіが付いた形を形容詞とみなすことも多く、派生なのかどうかという問題は残る。

#### 5. 動詞による名詞修飾

ここでは、動詞のいろいろな形による名詞修飾を考察する。そして、動詞とそれが修飾する名詞との関係が形の上でどのようにあらわれるかということを考察の目的にする。いろいろな形といっても、名詞修飾に関係の深い形というものがある。カザフ語の動詞で名詞修飾に関係の深い形というと、まっ先に思い浮かぶのがいわゆる、分詞形である。そこで、まず、分詞形について概観しておく。

##### 分詞形

分詞形 (есімше) には、1) ген 形と 2) етін 形、それに 3) ер 形の 3 つがある (Қараев 1993)。

1) ген 形 (異形態 ған~қан~кен) は過去 (өткен шақ) 形と呼ばれることもある (Қараев 1993) ように、過去を表すことが多い。2) етін 形 (異形態 атын~йтын~ітін) は未来 (келер шақ) 形と呼ばれることもあるように、未来を表すことが多い。3) ер 形 (異形態 ар~

p) も未来 (келер шак) 形と呼ばれることがあるが、未来というよりはむしろ ағар су 「流水」、мінер ат 「乗る馬」等のようにテンスとは関係のない用法が主であるようである。

なお、トルコ語では統語的な関係で分詞には主語が立つ分詞と立たない分詞の2種類あるが、カザフ語では例えば、「私が行った学校」は мен барған мектеп, で、「本を読んだ子供」は кітап оқыған бала, で、同じ形を使う (cf. トルコ語 benim okuduğum kitap; kitap okuyan çocuk)。

次に名詞修飾をその第一の職能としているわけではないが、名詞修飾と関係のないわけではない、動名詞について簡単に触れておく。

動名詞 (қимыл есім) は動詞語幹に -у を付けることによって作られる。(例 келу 「来ること」、бару 「行くこと」、жеу 「食べること」、жасау 「作ること」) 動名詞は格語尾をとることができ、統語的には名詞として働く。また辞書における動詞の見だし形としてもよく用いられる。分詞には現在・過去・未来の別があったが動名詞にはそういった区別はなく、より陳述性が低いといえる<sup>13)</sup>。

終止形についても触れておく。本稿ではカザフ語で ашық рай と呼ばれているカテゴリーに属す動詞の諸形をまとめて便宜上終止形と呼ぶことにする。具体的には現在形、過去形、未来形が入り、いずれも人称を表す形式が付き、文を終わらせることができる。

動詞による修飾というと、日本語では「内の関係」と「外の関係」の区別が問題にされることが多い。そして問題にされる大きな理由として「内の関係」「外の関係」といった修飾の仕方の違いを形式の上で顕在化しないことがあげられる(益岡 1994)。また、英語ではいわゆる「関係節」「同格節」というものが存在することは言うまでもない。

一方、カザフ語では日本語における、いわゆる「内の関係」「外の関係」の区別がどのようにされているかについてはこれまで全くといっていいほど解明されていない。もちろん、分詞の用法などの個々の記述はないわけではないが、例えば、ККТなどの修飾の記述では満足のいく答えが得られない。先にも述べたように、日本語では修飾の仕方の違いが基本的に形の上で顕在化していないことが指摘されているが、カザフ語では何種類かの形が名詞修飾に用いられる。すると当然どういう場合にどれを用いるかという疑問がでてくる。そこで、本稿ではこれら「内の関係」「外の関係」の区別がカザフ語でどのようになされているか、あるいはなされていないかということに重点をおいて、カザフ語の節による名詞修飾を解明することにした。

## 5. 1 内の関係と外の関係

日本語ではたとえば、

(1) さんまを焼く男

(2) さんまを焼くにおい

という2つはどちらも名詞修飾構造で、(1)では、修飾部と主名詞が「男がさんまを焼く」という関係を含みながら、修飾被修飾の形にあるのに対し、(2)はそうではないということが指

摘されている。(2)では、「においが焼く」わけではないし、「においを焼く」わけでもない(寺村 1975-1978)。これらをどういう名称で呼ぶかは人によって異なるが、本稿では寺村(1975-1978)にならって(1)のような関係を「内の関係」、(2)のような関係を「外の関係」と呼ぶことにする。

### 5. 1. 1. 内の関係による修飾

内の関係では、直接そうなったかどうかという議論の余地はあるものの、二つの文の合成によって関係が成立したと考えることができる。例えば、

Бұл кісі — жазушы<sup>14)</sup>. 「この人は作家だ。」

Бұл жазушы “Қара боран” деген романды жазды. 「この作家は「嵐」という小説を書いた。」

→Бұл кісі “Қара боран” деген романды жазған жазушы. 「この人は「嵐」という小説を書いた作家だ。」

上の例では被修飾名詞になる名詞жазушыは主格である。それでは、主格の名詞だけが内の関係を成立させることができるのか、言い換えれば、どの格の名詞が内の関係を成立させることができるのかということが問題になる。例えば、日本語では、「から」のついた名詞は底の名詞になるのが難しいといったことが明らかにされている(寺村 1975-1978)。この点、カザフ語についてはまだ分かっていないことが多い。そこで、本節ではどの格の名詞が内の関係を成立させることができるのかに焦点をあてる。なお、カザフ語の格については2. 1 参照。

#### 主格

まず、主格の名詞である。カザフ語の格と日本語の格助詞の付いた名詞をごく大まかに対応させると、主格の名詞は「が」格の名詞に相当すると考えることができる。日本語では「が」の付いた名詞は例外なく主名詞に転出できると言われている。(寺村 1975-78)。カザフ語の主格の名詞を見てみると、

Ит еденде ұйықтап жатыр. 「犬が床で寝ている。」

еденде ұйықтап жатқан ит 「床で寝ている犬」

Нұрбек библиотекада кітап оқып отыр. 「ヌルベクは図書館で本を読んでいる。」

Библиотекада кітап оқып отырған Нұрбек. 「図書館で本を読んでいるヌルベク」

等のようになる。

主格の名詞は問題なく底の名詞に転出できるようである。

#### 対格

次に体格の名詞を見てみよう。

Нұрбек базардан мына қаламды алды. 「ヌルベクはバザールでこのペンを買った。」

Нұрбек базардан алған мына қалам 「ヌルベクがバザールで買ったこのペン」

対格の名詞も底の名詞に転出できると考えられる。

#### 与格

続いて与格の名詞はどうかというと、

Нұрбек Анкараға барды. 「ヌルベクはアンカラ（地名）へ行った。」

Нұрбек барған Анкара — Түркияның астанасы<sup>14)</sup>. 「ヌルベクが行ったアンカラはトルコの首都である。」

Нұрбек қалаға келді. 「ヌルベクは町へ来た。」

Нұрбек келген қала — Шымкент. 「ヌルベクが来た町はチムケント（地名）である。」

与格の名詞も底の名詞に転出できるようである。ただしいわゆる時間を表す与格や値段を表す与格の場合は転出が難しい。? Нұрбек ол кітапты алған жетпіс теңге 「ヌルベクがその本を買った70テンゲ（通貨の単位）」 (←Нұрбек ол кітапты жетпіс теңгеге алды. 「ヌルベクはその本を70テンゲで買った。」) 時間や値段を表す与格がどんなときに用いられるかを考えてみると、当然のことながら数詞あるいは数詞に類したものが与格形になっているときであることがわかる。そうすると、転出できるかどうかという以前に数詞が修飾されるとはどういうことかが問題になるであろう。ここではこれ以上はふみこめないが、カザフ語では数詞と名詞は品詞が違う以上、名詞修飾と数詞修飾では違う点があることは十分に予想できる。もっとも、時間や値段を表す与格が全く転出できないわけではなく、やや不自然ではあるものの次のような例をあげることができる。

Нұрбек рұқсат алған екі күн — ол үшін қысқа уақыт. 「ヌルベクが休暇をとった二日間は彼にとっては短い時間である。」

(←Нұрбек екі күнге рұқсат алды. 「ヌルベクは二日間の休暇をとった。」)

#### 位格

今度は位格の名詞についてみてみよう。

Нұрбек қонақ үйде бір шетелдікті көрді. 「ヌルベクはホテルで外国人に会った。」

Нұрбек шетелдікті көрген қонақ үй (осы.) 「ヌルベクが外国人に会ったホテル（はここである。）」

Нұрбек бір қалада ауырып калды. 「ヌルベクは町で病気になった。」

Нұрбек ауырып калған қала (—Шымкент.) 「ヌルベクが病気になった町（はチムケント（地名）である。）」

位格の名詞も底の名詞に転出できると考えていい。

## 奪格

奪格が日本語の「から」に相当するとすると、日本語では「から」の付いた名詞は先にも述べたように底の名詞に転出することが難しいと言われている。カザフ語で奪格の名詞はどうだろうか。まず、「でどころ」の奪格から見ていこう。

Нұрбек кеше қаладан шықты. 「ヌルベクは昨日町を離れた。」

Нұрбек кеше шыққан қала (—Шымкент.) 「ヌルベクが昨日離れた町 (はチムケントである。)」  
上のような場合は底の名詞に転出できるが、問題がないわけではない。

Нұрбек Шымкенттен келді. 「ヌルベクはチムケントから来た。」

Нұрбек келген Шымкент — Қазақстанның ең көркем қаласы. (ヌルベク・来た・チムケント・カザフスタンの・もっとも・美しい・町)

この文を見て、ヌルベクはチムケントから来たと解釈することも不可能ではないが、普通はチムケントへ来たと解釈される。このことは日本語においても同じで、「太郎が来た町」というと、「太郎がその町へ来た」と解釈するほうが普通であり、なぜそうなるのかについて動詞と助詞との結びつきにおいて、「縁が深い」からだとしている (寺村 1980)。

次に「でどころ」と関係のないいわゆる奪格支配の場合をみてみよう。

例えば、次のкорғуは奪格を要求する (奪格支配) 動詞である。

Мен Нұрбектің итінен қорқамын. 「私はヌルベクの犬がこわい。」

Мен қорққан Нұрбектің иті (өте үлкен.) 「私がおそれているヌルベクの犬 (はとても大きい。)」

この場合は問題なく転出できるようである。

他に奪格を要求するものとして次のような例をあげることができる。

Емтиханда берген жауабымнан шұбаланып тұрмын. 「試験の答えを心配している」

Мен шұбаланып тұрған жауабым дұрыс емес екен. 「心配していた答えは (やはり) 間違っていた。」

これら、奪格支配は奪格をとることが容易に予想されるため、つまり、「縁が深い」ため、底の名詞に転出しやすいのだと考えられる。

いずれにしても、奪格の名詞は他の格に比べるとやや難があるとは言うものの、底の名詞に転出できると考えてよさそうである。

## 補助格

補助格の用法にもいろいろあるが、まず道具・手段を表す場合からみていこう。

Нұрбек ұшақпен келді. 「ヌルベクは飛行機で来た。」

Нұрбек келген ұшақ. 「ヌルベクが来た飛行機」

上の例で見ると可能である。

次に、共同関係を表す用法であるが、これも可能と考えていい。

Оқытушымен әңгімелестім. 「先生と話をした。」

Мен әңгімелескен оқытушының аты Нұрбек. 「私が話をした先生の名前はヌルベクである。」

一方、動作の仕方や時間を表す補助格の名詞は転出が可能ではなくなる。

Сайра ықласпен тыңдады. 「サイラは注意して聞いた。」

\*Сайра тыңдаған ықлас — мынадай. 「サイラ・聞いた・注意・このような」

Нұрбек таң атысымен жүріп кетті. 「ヌルベクは夜明けとともに出発した。」

\*Нұрбек жүріп кеткен таң атысы (ヌルベク・進んで・去った (出発した)・暁・明け)

属格

最後に属格をみておこう。

Нұрбектің інісі науқас. 「ヌルベクの弟は病気である。」

інісі науқас болған Нұрбек 「弟が病気のヌルベク」

Бұл кітаптың мазмұны өте қызық.<sup>15)</sup> 「この本の内容はとてもおもしろい。」

мазмұны өте қызық бұл кітап 「(その) 内容がとてもおもしろいこの本」

ここですぐ気がつくのは、被修飾名詞に付いている所有接尾辞 (上の例ではінісіにおけるci, мазмұныにおけるы) はそのまま残る, ということである。所有接尾辞を削除すると非文法的になる。

\*іні науқас болған Нұрбек 「弟・病気・なった・ヌルベク」

\*мазмұн өте қызық бұл кітап 「内容・とても・おもしろい・この・本」

まとめ

上で見たように、転出が全く不可能な格というのはないが同じ格語尾が付いていても用法の違いによって転出が可能な場合と不可能な場合があることがわかる。また、Нұрбек келген қала 「ヌルベクが来た町」のようにある動詞が複数の格をとることが可能な場合、例えば—ге келуと—ден келу (—ге: 与格, —ден: 奪格, келу: 「来る」) 等の場合は、転出したときにどちらの格で理解されるかに優先順位があるのでないかということも指摘できる。

## 5・1・2 外の関係

一般に内の関係では修飾される名詞は何でもよいが、外の関係による修飾を受けることのできる名詞は一定の意味特性をそなえたものでなければならないと言われている (寺村1975—1978)。ここでは、寺村による意味特性の類型化にしたがってカザフ語の外の関係の名詞修飾を解明する。寺村 (1980) による類型化は次のとおりである。発話の名詞, 思考の名詞, コトの名詞, 感覚の名詞, 半叙述性的名詞, 相対性的名詞。これらの分類は完全に名詞の意味特性によるものでもなく, 修飾部の内部構造の違いにもよっている。例えば「意見」は思考の名詞に, 「意向」は半叙

述性の名詞に入れられているが、その理由はそれらがとる修飾部分の構造の違いによる。日本語とカザフ語で語義的に似ている語が同じようなふるまいをするとは限らないということも十分承知の上、あえてまず、語義の似ているものを手がかりにして分析を始める。本稿では、カザフ語の名詞修飾がどのようなになっているかをまず説明することが目的であるので、まず、各グループに意味的に入ると思われる名詞がどのような修飾構造をとるかを観察し、その後であらためて構造別に考察することにする。

外の関係による修飾を考えるとときに重要な点として、日本語では「太郎が留学するといううわさ」のように被修飾名詞の前に「という」というつなぎのことばが入ることがある。日本語の「という」によく似た働きをするものはカザフ語ではдегенである。しかしながらдегенがどういう名詞の修飾に必要なかはよくわかっていない。また、日本語では「という」を介しさえすればどのような形の文でも名詞につなげることができるといわれているが、カザフ語ではどのようなのであろうか。本節ではこれらの点について説明する。

#### 発話の名詞

発話の名詞はその内容を文の形で表すことができ日本語の発話の名詞は修飾部との間に「という」というつなぎのことばがいると言われている（寺村 1980）。

発話の名詞にはхат「手紙」、бұйрық「命令」、жауап「返事・答え」、өсек「うわさ」、телеграмма「電報」などが入ると考えられる。

これらがどんな表現をとるか見てみよう。

хат「手紙」

ертең Алматыға барамын деген хат「(私は) あしたアルマアタへ行くという手紙」  
のように、被修飾名詞хатの前にдегенが現れる。дегенを取ってしまうと非文法的になる。

\*ертең Алматыға барамын хат「明日・アルマアタへ・(私は) 行く・手紙」

дегенの前に来る動詞はこの場合барамын一人称単数現在形、つまり終止形になっている。ちなみに終止形を分詞形にかえると、

ертең Алматыға баратын хат「あしたアルマアタへ行く手紙 (=明日アルマアタへ送られる手紙)」

というようになる。これは非文法的ではない、つまり可能な表現であるが意味的にはこの場合アルマアタへ行くのは「手紙」であって手紙に書かれている「人」ではない。つまり「手紙」が「アルマアタへ行く」ということになり、内の関係の修飾になってしまう。

次にдегенの前の部分にどの程度完全な文が来ることができるか見てみよう。

Нұрбек Алматыға келді деген хат「ヌルベクがアルマアタへ来たという手紙」

дегенの前の部分、Нұрбек Алматыға келдіはこのままで完全な文であり、Нұрбекは主語である。つまり、主語付きの完全な文が来ることができると考えていいようである。次に、疑問文



が来る表現,

ертең Алматыға келесіз бе деген хат「あしたアルマアタへ来るかという手紙」  
も可能である。もちろんこの中のертең Алматыға келесіз беはそのまま単独で疑問文に用いられる(Ертең Алматыға келесіз бе? 「あしたアルマアタへ来ますか。」)。続いて命令文はどうかというと、これも、

ертең Алматыға кел деген хат「あしたマルマアタへ来いとい手紙」  
のように問題ない。дегенの前には疑問文、命令文など完全な文が来ることができると考えられる。

бұйрық「命令」

7-айдын, 25-күні Алматыға кел деген бұйрық「7月25日アルマアタへ来いという命令」  
これも上のхатの場合と同じく、дегенが現れ、дегенの前の動詞は命令形である。келの前の部分はやはり文であると考えられる。ただし、бұйрықは、дегенの前に他の終止形ではなく命令形が来るのが圧倒的に多い。これは、бұйрықの持つ意味によるものであると考えられる。дегенの必要性はどうかというと、дегенを取ってしまうとやはり非文法的になる。

\* 7-айдын, 25-күні Алматыға кел бұйрық (7月の・25日・アルマアタへ・来い・命令)

\* 7-айдын, 25-күні Алматыға кел бұйрығы (7月の・25日・アルマアタへ来い・その命令) (ちなみに、トルコ語ではこのタイプの表現が可能である(藤家 1995) cf. 25 Temmuz Ankara'ya gel emri)

以下、このグループに入ると思われる名詞を簡単にみておこう。

жауап「返事」

мен бармаймын деген жауап「私は行かないという返事」

やはりдегенは必要であり、дегенのない次の表現はいずれも非文法的である。

\* мен бармаймын жауап (私・行かない(終止形)・返事)

\* мен бармаймын жауабы (私・行かない(終止形)・(その)返事)

\* мен бармаймын жауап (私・行かない(分詞形)・返事)

өсек「うわさ」

Нұрбек өлді деген өсекті естідім。「ヌルベクが死んだといううわさを聞いた。」

өсекもдегенを必要とする。дегенがないと非文法的になる。

\* Нұрбек өлді өсекті естідім。(ヌルベク・死んだ(終止形)・うわさを・聞いた)

分詞形によることもできない。

\* Нұрбек өлген өсекті естідім。(ヌルベク・死んだ(分詞形)・うわさを・聞いた)

телеграмма「電報」

Жиынға қатынасаңыз деген телеграмма келді。「会議に参加しろという電報が来た。」

これもやはりдегенが介在する。

以上のことから次のようなことが言えるであろう。発話の名詞は修飾部に *деген* を伴う。そして *бұйрық* のように多少制限のあるものもあるものの、*деген* の前には平叙文、疑問文、命令文など、完全な文が来る。分詞形による修飾は認められず、*ертең Алматыға баратын хат* のように、分詞形による修飾にすると内の関係として理解されるものもある。

#### 思考の名詞

思考の名詞には意味的に *ой* 「考え」、*пікір* 「考え」、*ниет* 「気、意図」、*күмән* 「疑い」、*үміт* 「希望」等が入ると考えられる。日本語では発話の名詞と思考の名詞を区別する必要があるが、カザフ語では区別する必要があるのだろうか<sup>16)</sup>。

*ой* 「考え」

*Жапонияға барып оқимын деген ойым* 「日本へ行って勉強する考え」

*ой* の前に来る修飾部にはやはり、*деген* がある。*деген* がないとそのままでは非文法的である。

\* *Жапонияға барып оқимын ойым* (日本へ・行って・勉強する (終止形) ・考え)

*деген* がない場合でも分詞形にすると文法的な表現になる。

*Жапонияға барып оқитын ойым* (日本へ・行って・勉強する (分詞形) ・考え) 「日本へ行って勉強する考え」

*пікір* 「意見」

*Нұрбектің айтқаны дұрыс емес деген пікірді естідім.* 「ヌルベクの言ったことは正しくないという意見を聞いた。」

やはり、*деген* が現れている。

*күмән* 「疑い」

*Нұрбек қой ұрлады деген күмәнмен қолға алынды.* 「ヌルбекは羊を盗んだ疑いでつかまった。」

*күмән* を修飾している部分にはやはり *деген* がある。日本語では「羊を盗んだ疑い」のように「という」がなくてもかまわないが *күмән* には *деген* が必要である。\* *Нұрбек қой ұрлады күмәнмен қолға алынды.* 分詞形を用いると *деген* がなくても可能になる。

*Нұрбек қой ұрлаған күмәнмен қолға алынды.* (ヌルбек・羊を盗んだ・疑いで・つかまった (қолға алу つかまる)) 「ヌルбекは羊を盗んだ疑いでつかまった。」

*ниет* 「気、意図」

この語は日本語訳をどのようにつけるかによって扱いが変わってくる。すなわち、「意図」と訳すと後で述べる半叙述性的の名詞に入れなければならない。このような問題はもちろん *ниет* だけに限ったことではない。とりあえず思考の名詞に入れておく。

Нұрбектің орысша оқимын деген ниеті жоқ. 「ヌルベクにはロシア語を勉強するつもりがない。」

やはりдегенが現れ、дегенの前には一人称単数現在形が来ている。

そして、この場合三人称単数形にすることはできない。

\*Нұрбектің орысша оқиды деген ниеті жоқ.

つまりより正確に訳すと、「ヌルベクには「ロシア語を勉強する」という気がない。」というようになる。この点を考えると半叙述性的名詞ではなく思考の名詞に入れる方が妥当である。分詞を用いた次のような表現も可能である。

Нұрбектің орысша оқитын ниеті жоқ. 「ヌルベクにはロシア語を勉強する気がない。」

үміт「希望」

Нұрбектің астанаға барып жұмыс істеп бай болайын деген үміті бар. 「ヌルベクは都へ出て仕事をして金持ちになる希望がある。」

思考の名詞についてまとめると次のようになる。思考の名詞に入る名詞はдегенを伴う。ただし、分詞を用いた表現が可能なものもあり、分詞形を用いる場合はдегенを伴わない。

#### コトの名詞

コトの名詞にはіс「こと」、оқиға「事件」、түс「夢」、мүмкіндік「可能性」、қауіп「危険」等が入ると考えられる。この種の名詞は事柄の内容を修飾部で表す。日本語ではコトの名詞は修飾部に「という」があってもなくてもよいと言われている（寺村 1980）。

іс「こと・事実」

Нұрбек Сайраның бес жыл бұрын Аманболмен үйленген ісін білген жоқ. 「ヌルベクはサイラが5年前にアマンボル（人名）と結婚したことを知らない。」

үйленгенは分詞形である。分詞形のかわりに終止形+дегенを用いた次の表現も可能であるが少し不自然である。

? Нұрбек Сайраның 5 жыл бұрын Аманболмен үйленді деген ісін білген жоқ.

оқиға「事件」

分詞形を用いた表現、終止形+дегенを用いた表現のいずれも可能である。

Нұрбектің президентті өлдірген оқиғасын білесің бе? 「ヌルベクが大統領を殺した事件を君は知っているか。」

Нұрбек президентті өлдірді деген оқиғаны білесің бе? (ヌルベク・大統領を・殺した（終止形）・деген・事件を・知っている・か）終止形で修飾する場合はдегенが必須である。

\*Нұрбек президентті өлдірді оқиғасын білесің бе? (ヌルベク・大統領を・殺した・事件を・知っている・か)

мүмкіндік「可能性」

Әлем адамдарының жер шарына келетін мүмкіндігі жоқ емес. 「宇宙人が地球に来る可能性はゼロではない。」

келетін は分詞形である。発話の名詞や思考の名詞とは違って、分詞形が現れる。さらに、動名詞を用いた表現もある。

Әлем адамдарының жер шарына келу мүмкіндігі жоқ емес.

келу が動名詞である。ちなみに、деген を伴った表現も可能である。

Әлем адамдары жер шарына келеді деген мүмкіндік жоқ емес.

қауіп 「危険」

Шікі етті жейтін болса аурып қалатын қауіп болады. 「生の肉を食べると病気になる危険がある。」

(аурып) қалатын は分詞形である。動名詞を用いることもできる。

Шікі етті жейтін болса аурып қалу қауіпі болады.

деген を用いた表現,

? Шікі етті жейтін болса ауырып қалады деген қауіп болады. (生の・肉を・食べる・と・病気になって・しまう・деген・危険・ある) は不自然である。

түс 「夢」

Нұрбек Сайраны жолбарыс жеп қойған түс көрді. 「ヌルбекはサイラをトラが食べてしまう夢を見た。」

この場合も分詞形を用いている。ただし、「夢」などは、必ずしも修飾部が名詞の内容を表しているとは考えられないことがある。例えば、「夢で花子が虎に食べられた」のように、内の関係の解釈も不可能ではない。「夢」などは区別して考える必要もありそうである。

上で見たように、コトの名詞は発話の名詞と違って修飾には分詞形が用いられる。終止形+ деген による修飾が可能なものもあるが、қауіп のように、終止形+деген による修飾が不自然なものもある。

感覚の名詞

このグループにはиіс 「におい」、дүбір 「音」、бейне 「姿・光景」、дауыс 「声」、сыбыс 「気配」等が入ると考えられる。感覚の名詞は感覚の内容を修飾部で表すことができる。日本語の感覚の名詞は修飾部に「という」は入らないとされている (寺村 1980)。

иіс 「におい」

қой етін қақтаған иіс 「羊の肉を焼くにおい」

қақтаған は分詞形である。分詞形の代わりに終止形+деген を用いることはできない。

\*қой етін қақтады деген иіс

なお、内の関係による修飾、「羊の肉を焼く人」は、

қой етін қақтаған кісі

で、

қой етін қақтағанは全く同じであるところが興味深い。

дүбір「音」

Жылқы шапқылаған дүбір естіледі.「馬が駆ける音が聞こえる。」

分詞形шапқылағанが用いられ、終止形+дегенによる修飾はできない。

\*Жылқы шапқылаған дүбір естіледі.

бейне「姿」

Класта оқушылардың Жапон тілін үйреніп жатқан бейнесі білінеді.

「教室で学生が日本語を学ぶ姿が見える。」

やはり分詞形が用いられ、終止形+дегенを用いることはできない。

\*Класта оқушылардың Жапон тілін үйреніп жатады деген бейнесі білінеді.

дауыс「声」

Нұрбектің ән айтып дауысы естіледі.「ヌルベクが歌を歌う声がある。」

дауысも修飾に分詞形が用いられ、終止形+дегенを用いると非文法的になる。

\*Нұрбектің ән айтып дауысы естіледі.

сыбыс「気配」

Мысықтың жақындаған сыбысы білінді.「ネコが近づいてくる気配がした。」

сыбысも同様に分詞形による修飾は可能であるが、終止形+дегенによることはできない。

以上見たように感覚の名詞はその修飾に分詞形が用いられ、終止形+дегенによる修飾はできない。この点、分詞形による修飾が不可能で終止形+дегенによる修飾が可能な、発話の名詞とは反対である。なお、「羊の肉を焼くにおい」のような表現はトルコ語では見られないと言われているが、カザフ語では分詞形を用いることによって日本語に似たタイプの表現が可能であることが興味深い。

## 半叙述性の名詞

半叙述性とは、修飾部に主格の成分が現れないという意味である（寺村 1980）。例えば、「癖」「約束」等に内容修飾的にかかる動詞の主体は常に「持ち主」あるいは「仕手」であり、それ以外ということはない。例えば「太郎には花子が貧乏揺すりをするくせがある。」「太郎は花子が刑務所に入った経歴がある」等とは普通言わないであろう。カザフ語でも同様に修飾部に主格の成分が現れないかどうかは後に検討する（原理的には現れないはずである）。

意味的にみてこのグループに入ると考えられるものには、мінез「性質」、әдет「習慣」、тағдыр「運命」、бағыт「方針」、あまり一般的な語ではないがкешіріме「経歴」等がある。

мінез「性質」

Нұрбектің спорт программаларын көрсе болды қызып кететін мінезі бар. 「ヌルベクはスポーツ番組を見ると熱狂する性質がある。」

әдет「習慣」

күніне төрт рет моншаға түсетін әдет 「日に4回シャワーを浴びる習慣」

тағдыр「運命」

Нұрбектің Алматыда өлетін тағдырын тек құдай ғана біледі. 「ヌルベクのアルマアタで死ぬ運命を神様だけが知っている。」

бағыт「方針」

өндірісті бес есе арттыратын бағыт 「生産を5倍に増やす方針」

кешіріме「経歴」

Нұрбектің дәрмеге кірген кешірімесі бар. 「ヌルベクには刑務所に入った経歴がある。」  
このように、分詞形＋名詞のパターンをとることが多い。ただし、бағытは次のように動名詞形を用いた表現も可能である。

өндірісті бес есе арттыру бағыты 「生産を5倍に増やす方針」

ところで、これらの半叙述性名詞は日本語では主語が立たないと言われている（寺村 1980）  
カザフ語ではどうなのかチェックしてみよう。

上の例は、「属格形の名詞＋分詞＋非修飾名詞」という構造になっていて、分詞の主語は現れていない。一見主語のように見えるНұрбектіңは分詞ではなく被修飾名詞にかかる。被修飾名詞には所有接尾辞が付き、上の例ではНұрбектіңを受けている。ためしにНұрбектіңをМенің「私の」にかえてみると、所有接尾辞もそれに応じて一人称単数形の所有接尾辞である-імにかわる（Менің спорт программасын көрсем болды қызып кететін мінезім бар. 「私にはスポーツ番組を見ると熱狂する性質がある。」）。つまり上の例では主語は立っていない。それでは無理に主語を立てると、

\*Нұрбек спорт программаларын көрсе болды қызып кететін мінезібар.

となるであろうがこれは非文法的である。

これと同じように被修飾名詞に所有接尾辞が付く例は発話の名詞を修飾する場合にもあった。今、属格形の名詞と名詞の所有者の関係を見てみると、мінезіの所有者はНұрбек、қызып кететінの主語はやはりНұрбекである。кешірімесіについても、所有者はНұрбек、кірген動作主もやはりНұрбекである。

このように、半叙述性名詞では、名詞の所有者と動詞の主語は一致している。一方、他のグループの名詞の場合、例えば発話の名詞では、Сайраның Нұрбек Алматыға келді деген хатын оқыдым. 「ヌルベクがアルマアタへ来たというサイラの手紙を読んだ。」

のように、хатの所有者は、Сайраで、келдіの主語はНұрбекのように、名詞と修飾部の主語が

一致しないこともある。

### 相対性の名詞

このグループに入る名詞の修飾法は一見、内の関係に似ている点もあるが、意味が相対的になるという点で大きく違っている。「右」「左」「前日」「翌日」「原因」「結果」等がこのグループに入る。例えば「翌日」について見てみると、「ヌルベクが来日した翌日東京では大雪が降った。」という例では、内の関係のように「翌日」に「ヌルベクが来日した」のではない。「翌日」に何があったかという修飾部の「ヌルベクが来日した」ではなく、「東京では大雪が降った」である。ヌルベクが来日したのはその「前日」であると考えられる。同じように、「太郎はタバコを吸いすぎた結果病気になった。」では「結果」の内容、つまりタバコを吸いすぎてどうなったかという「病気になった」であって、「結果」を修飾している「タバコを吸いすぎた」ではない。「タバコを吸いすぎた」は意味的には「結果」ではなく「原因」である。相対性の名詞とはこのようなもののことである。

結論から先に言うと、相対性の名詞は、カザフ語では日本語のような修飾方法をとらないことが多い。日本語には例えば、

「私が座った左に花子が座った。」

「太郎が日本に着いた翌日東京では大雪が降った。」

のような表現があるが、これらはカザフ語では分詞形プラス相対性の名詞で表すことができない。

\* Мен отырған сол жақта Нұрбек отырды. 「私が座った左側にヌルベクが座った。」

ただしこの文のつぎのような解釈は可能である。ヌルベクは私の左側に座ったのではなく、私が座っている、何かの左側に座った（ヌルベクも私も共に左側に座った）。つまり、内の関係の修飾である。

いまひとつ別の例を見ておくと、

ертең 「翌日」

\* Нұрбек Жапонияға келген ертеңде Токиода қалың қар жауды. (ヌルベク・日本へ・来た(分詞形)・翌日に・東京で・たくさんの・雪・降った)

また、言うまでもないことだが、終止形+дегенを用いた表現も不可能である。

\* Мен отырдым деген сол жақта Нұрбек отырды. (私・座った(終止形) деген左・側に・ヌルベク・座った)

\* Нұрбек жапонияға келді деген ертеңде Токиода қалың қар жауды. (ヌルベク・日本へ・来た(終止形)・деген・翌日に・東京で・たくさんの・雪・降った)

このように、相対性の名詞は動詞の分詞形や終止形による修飾はできないわけだが、次のような例はある。

екі сөздің жиі қолданылуының нәтижесінде бір сөз болды. 「二つの語が頻繁に使われたこ

との結果として一つの語になった。」

これは動名詞қолданылуを用いた表現であるが, қолданылуは属格語尾をとって被修飾名詞もそれに応じて三人称の所有接尾辞をとり, タイプとしては名詞による名詞修飾になっている。このようなものを動詞による修飾としていいかどうかは疑問である。いずれにしても動名詞による修飾とは何であるかはあらためて考えなくてはならない問題である。

#### まとめ

発話の名詞, 思考の名詞, コトの名詞, 感覚の名詞, 半叙述性の名詞, 相対性の名詞についてそれらがとる修飾部を形の違いによってまとめるとつぎようになる。

「終止形+деген+名詞」・・・発話の名詞・思考の名詞・コトの名詞の一部

「分詞形+名詞」・・・思考の名詞・感覚の名詞・半叙述性の名詞

(直接) 名詞修飾にならないもの・・・相対性の名詞

この他に動名詞による修飾もあった。

修飾部の形と被修飾名詞の関係を通して, はじめに行った被修飾名詞のグループ分けを検討してみる。相対性の名詞は分詞形による修飾も終止形+дегенによる修飾もできない, つまり外の関係による修飾ができないという点で明らかに他のものと異なっている。発話の名詞も分詞形による修飾が不可能という点でこれも他のものと異なっている。思考の名詞とコトの名詞についてはグループとしてはとりたてて言うほどの特徴はない。ただ, コトの名詞に入れたic, қауіпはдегенを伴った修飾にやや難があることから, 「終止形+дегенによる修飾が不自然」なグループとしてこれらを独立させることも考えられないわけではないが, 不可能ならともかく, 不自然なだけではそこまでする必要はないと思われる。半叙述性の名詞は主語なし分詞による修飾をとる。感覚の名詞も修飾部に分詞形が来るが, 終止形+дегенによる修飾が不可能という点で思考の名詞やコトの名詞とは異なっている。発話の名詞は終止形+дегенによる修飾しかできず, 一方感覚の名詞は分詞による修飾しかできないという点で両者は両極にあると言える。このように, 各グループとその修飾部の形との間には関係が明らかに認められ, カザフ語においてのこのようなグループ分けは十分意味のあることである。

つなぎのことはについて見ておくと, 修飾部が独立の文に近いものであるほど, それと主名詞を結びつけるつなぎのことは必要度が高く, 逆に修飾部がはっきりと陳述性のない, 単に「コト」を表すだけのものであることには, 日本語では「という」の介入は許されず, 英語では内容が that 節で表せず不定詞か前置詞句の形をとるという現象が見られると言われている (寺村1980)。この点をカザフ語について検討してみる。

まず, 修飾部が独立の文に近いものであるときは, 必ずつなぎのことはдегенが必要である。дегенを介せば, 修飾部には平叙文だけではなく疑問文や命令文も来ることができる。修飾部に分詞形が来る場合は分詞の前に主語が立つタイプと立たないタイプに分けられるが, いずれの場



合もつなぎのことばとしてのдегенを被修飾名詞との間に介在させることはできない。本稿では詳しく触れることはできなかったが、独立した文からはいちばん遠いものであると考えられる、動名詞による修飾もやはりдегенを必要としない。

以上のようなことから、カザフ語においても、外の関係においては被修飾名詞とそれを修飾する部分の形には明らかな関係が認められる、と言うことができる。

## 6. おわりに

以上、カザフ語の名詞修飾表現についてみてきたが、それによって以下の点がわかった。1) 格語尾の付いた名詞による修飾では、格語尾の付いた名詞が直接他の名詞を修飾できる場合がある反面、奪格語尾の付いた名詞のように他の名詞を直接修飾することが難しいものがある。そしてまた、つなぎのことばとしての-riのはたらきは非常に限られている。2) 動詞による修飾では、いわゆる「外の関係」による修飾では被修飾名詞の持つ意味とそれを修飾する部分の形に密接な関係がある。

本稿ではあまり深く探ることのできなかった動名詞などの問題を含めて今後はより一層の研究を進めていきたい。

## 注

- 1) 出典を明記していない用例は作例、またはインフォーマントから得たものである。作例についてはすべて複数のインフォーマント（全員三十代男性）の校閲を受けている。また非文法的であるかどうかは複数のインフォーマントの判断による。
- 2) 訳語はトルコ語の品詞の日本語訳（勝田 1986）等を参考にした。
- 3) сыбыр — сыбыр「カサカサ」等のいわゆる擬音語がこのカテゴリーに入る。
- 4) 助詞と訳したが日本語の助詞とはかなり異なるものである。
- 5) 三人称の所有接尾辞-i~ы~сы~сі。
- 6) қозықұйрық（子羊・しっぽ）「きのこ」のように所有接尾辞が付かない複合語もある。
- 7) 名詞用法の形容詞、動名詞等にも付く。
- 8) — деは位格、— геは与格語尾。
- 9) ここでは主に Geng (1989) の記述によった。用例も Geng (1989) によった。ただし人名等をかえたものもある。
- 10) 婦人が所有している帽子がすべて婦人帽とは限らない。
- 11) 作例。
- 12) ごくまれな例としてСонша алтынды қалай алады. のような副詞がそのまま名詞を修飾する例もある (KKT: 668)。
- 13) 動名詞に— y 形以外の他の形のものを入れる説 (KKT等) もあるが本稿では Geng (1989) に従い— y 形だけをとりあげる。

- 14) カザフ語の正書法では名詞述語文の主語と述語の間にハイフン “-” を入れる。
- 15) Geng (1989) の例。
- 16) 日本語で発話の名詞と思考の名詞を区別する理由は「という」が必須かどうかの違いによる。

## 参考文献

- Балақаев м., Кордабаев Т. (1966) Қазіргі қазақ тілі, Алматы.
- Қараев, М. ә. (1993) Қазақ тілі, Алматы.
- Қазақ тілінің грамматикасы I (ҚТГ), Қазақ ССР ғылым академиясы тіл білімі институты, Алматы, 1967.
- Қазақ тілінің түсіндірме сөздігі 1—10, Қазақ ССР ғылым академиясы тіл білімі институты, Алматы, 1974—1980.
- Қазіргі қазақ тілі (ҚТГ), Қазақ ССР ғылым академиясы, 1954  
(本稿では同書の1983年版 (Бейжиң ұлттар баспасы 出版) を使用)
- 勝田 茂 1982 『トルコ語教本』 大阪外国語大学
- 1986 『トルコ語文法読本』 大学書林
- 寺村秀夫 1975—1978 「連体修飾のシンタクスと意味—その1～その4—」, 『日本語・日本文化』 大阪外国語大学留学生別科
- 1980 「名詞修飾部の比較」, 『日英語比較講座 2 巻』 大修館書店
- 藤家洋昭 1995 「トルコ語の名詞修飾表現」 *Nebulae* Vol.18, Osaka Gaidai Linguistic Circle.
- 益岡隆志 1994 「名詞修飾節の接続形式—内容節を中心に—」, 『日本語の名詞修飾表現』 くろしお出版

(1996. 9. 12受理)